

藤本浄彦著

『実存的宗教論の研究』

幼い頃、田舎の我家で一匹の雌猫を飼っていた。その猫はお産で子猫を産み落とすと、必ず人目を避けて当分のあいだ、子育てをしていた。人目についてしまうと、子猫の首をくわえては、人目のつかぬ所へ……という習性が母猫にあることを、子供ながら知った。

——拙い一冊の著書をどうにか産み落した今、事実、この母猫のような思いであるときに、「自著を語る」べしというのは、筆者にとっては気の進まぬことであるが。

自らの研究課題に押し出されつつ、求められるままに、悪戦苦闘しては考えに考えを重ねた末に、大いなる後悔の念と共に未熟児の如きものを論文として発表すること、十有七年になる。悪戦苦闘と後悔の念とを重ねるうちに、全く不思議なことが、次第／＼に自らの課題が進み深まり、霧散していたものが見えてきて、その向うまで明るみの内に置かれてくる——丁度そんな時機に、偶然かつ幸運にも、その機縁が稔って本書の出版の話が

数社からもたらされて来た。

本書は、*「実存」*という問題を通して宗教を論じるものであり、その素材（対象）が、実存哲学の父たるS・キルケゴール、文化と宗教の境界の上に立つP・ティリッヒ、そして日本浄土教の大成者たる法然、という東と西の宗教思想家なのである。この素材構成は全く新しい学的地平を拓くと思う。また、素材が異なっても、それらへの学問的意識と方法の堅持によって、一つの体系が形成されるという思考が、そこに存しており、一つの特徴として強調されよう。

本書では、*「実存」*という問題に於て、それを具体的に全体として法然の宗教へと集約する脈略を提起した。少なくとも、*「実存」*を問題の中心軸とする宗教論の場で、法然浄土教を考察することによって明確化されていくことこそが、重視されねばならない。このような作業を施してはじめて、法然という稀有なる宗教者が、単に一宗派の宗祖としてのみならず、宗教論の持つ普遍的な枠組みの中で、正当に位置づけられ意義づけられうると思う。このような志向が、読者に充分な説得力を与え得るか否か——本書の鍵である。

本書は、右の諸点を著者自らの課題として

練り上げようとした作業現場からの産物である。刊行以後、多くの方から意見を戴き、さらなる現場作業が続いている。とくに、本学通信教育部の学生有志と仏教学科三回生K君は、綿密に読んで諸々の有意な質問を筆者に投げかけてくれている。そのような本学の学生との出会いも生じていることを付言しておきたい。一方、昨今の学術書では、どんな領域の学問であれ、外国語の要約を付すことは不可欠であろう。本書もすでに、それを通して目下、欧米の研究者達との対話と議論の輪を広げつつある。

要するに、一著書を世に問うという「時」は、すでにその著者の研究が次の課題へとスタートを切る「時」にはかなるまい。次なる悪戦苦闘がすでに始まっている。証し／＼としての著書公刊である——と思われる。それと共に、良き、出版社と担当者と援助者と共に恵まれて産み落しえたことも忘れえない。

なお、本書の出版にあたり、本学会会の出版助成を受けた。深く感謝するものである。

（ふじもと きよひこ 文学部助教授）

昭和六一年三月 平楽寺書店発行 A5版
本文三八〇頁・英文四〇頁・索引二八頁
定価 六、五〇〇円